

郡上八幡における市民まちづくり活動の 展開に関する研究

5218D028-8 中村遥*

岐阜県郡上市八幡町（以下、郡上八幡）は豊かな水資源や城下町の町並みなどの地域資源を活かした先進的なまちづくりが行われてきた。まちづくりにおいては市民組織による水環境保全や町並み保存といった働きかけが大きな役割を担ってきたが、会員の高齢化や資金面の課題を抱えている一方で、新たな主体による活動や行政による市民活動支援施策などが打ち出されている。本研究では市民組織による持続的な地域運営の議論のため、郡上八幡におけるまちづくり組織の活動のプロセスを関係者に対するインタビュー調査から明らかにすることを目的とする。分析においては、質的研究手法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析方法を用いる。分析の結果、郡上八幡における市民まちづくりの展開プロセスを把握し、カテゴリーとして【活動の背景】【活動の状態】【他組織との関係】【次段階】があり、12 の概念が生成された。

Key words:市民まちづくり組織、郡上八幡、インタビュー、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 序論

1.1 背景と目的

(1) 背景

まちづくりにおいて市民の主体的な関わりが重要であることは広く認識されている。しかしながら、市民のまちづくりに対する参画のあり方については円滑な事業推進のための形式的な意見聴取にとどまるケースも指摘されており、市民組織による主体的な取り組みと行政とパートナーシップの重要性が指摘されている¹⁾。とりわけ、人口減少や高齢化、それに伴う自治体の財政規模の縮小などの課題を抱える地方都市においては、市民組織が主導的役割を果たすようなまちづくりの取り組みへ寄せられる期待は大きい。

しかしながら、まちづくりに関わる市民組織については構成メンバーの高齢化や後継となる人材の不足、基盤である自治会等の地縁型組織への加入率の低下、活動資金の調達方法など様々な課題が存在する。持続可能なまちづくりのため、まちづくりにかかわる市民組織がいかにその活動を展開してきたのかをみることは意義があるといえる。

本研究の対象地である岐阜県郡上市八幡町（以下、郡上八幡）は、豊かな水資源と城下町の町並みという地域資源を生かしたまちづくりが 1980 年代から先進的に行われてきた地域であり、とりわけ市民組織の活動と行政による空間整備の連携がまちづくりにおいて大きな役割を果たしていた。しかしながら、中心的な役割を果たした市民組織が 2015 年には解散するなど、組織運営の課題が伺える。

一方で、移住・定住促進と空き家対策がまちの課題として注力されており、2008 年に交流・移住促進による地域活性化を目的とする外郭団体が設置され、2015 年には郡上八幡産業振興公社に空き家対策チームが結成されるなど、各種の策が講じられている。その結果、新たな動向として I

ターン・U ターンを含む新規住民が現れている³⁾。そういった新規住民や若者を中心として新たな価値意識による新たな活動を行う組織が増加⁴⁾しているなど、住民の質の変化によってまちづくり組織の基盤となる住民の価値観に関する変化も見て取れる。また、行政側も 2006 年に郡上市総合計画⁵⁾のなかで市民に身近な課題は市民自らが解決への取り組みを行い（自立・自律）、その範囲を超える課題については、行政が取り組む（補完）とする“市民協働”の考え方をまちづくりの基本方針として打ち出し、ネットワークの核となる窓口として市民協働センターを 2012 年に開設している。このような状況の中、2018 年に実施された今後のまちづくりに関する住民アンケート調査⁶⁾において、既存の市民組織によるテーマ型まちづくりの活動体制に対する限界が指摘されており既存組織を支える新たな組織の設立が待たれるという意見が挙げられるなど、まちづくりを担う組織のあり方についての転換期にあるといえる。

(2) 目的

本研究ではこれまで市民主体のまちづくりにおいて先進的な取り組みの蓄積を持ちつつも、既存の組織の体制の課題に直面し、組織のあり方について転換期を迎える郡上八幡を対象地とする。組織のコアメンバーに対するインタビュー調査を行い、①郡上八幡における市民まちづくり活動の実態を把握することと、そのデータに対して質的分析を行うことで②郡上八幡における市民まちづくり活動の展開プロセスを明らかにすることを本研究の目的とする。

これにより、郡上八幡における市民組織の今後に向けた議論や、地方自治体における市民主導による持続的な地域運営の一助となることを期待する。

(3) 研究対象とする市民まちづくり組織の定義

本研究における市民まちづくり組織を定義・説明するため、総務省コミュニティ研究会資料⁷⁾から、マッキーバーのコミュニティ論を引用したコミュニティの分類を参照す

る。本研究における調査対象組織は地域性を反映した地域コミュニティかつ、非地縁かつ特定目的のための機能団体（アソシエーション）の領域に属する組織と考えられる。以上より、本研究の調査対象とする“市民まちづくり組織”の定義を以下のように設定する。

- ・ 地域性を反映した、特定の活動目的をもつ機能団体
- ・ 郡上八幡のまちづくりの潮流が生まれた 1970 年代後半以降に設立された組織
- ・ 組織の構成員間の利益に留まらず、郡上八幡における公共的な活動意義を有する組織

1.2 既存研究の整理と本研究の位置づけ

(1) 既存研究の整理

本研究に関わりのある研究として、a)郡上八幡のまちづくりにかかわる組織および主体に関する研究、b)まちづくりにかかわる市民組織の継続性に関する研究が挙げられる。また、組織の展開プロセスを把握する研究手法として質的研究手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）を用いる。したがって、c)GTA を用いた計画学領域の研究についても既存研究として以下に挙げる。

a) 郡上八幡のまちづくり組織および主体に関する研究

高橋²⁾は地方における先進的なまちづくりにおける展開プロセスを明らかにすることを目的とし、市民まちづくり組織の関係者へのインタビューから整理を行なっている。12 の組織に対して、発足目的や活動内容から「水環境保全」「町並み保存」「参加協働」「踊り伝承」「産業振興」の 5 つに分類し、また具体的な空間整備において各組織の果たした役割などを把握することでまちづくり組織がシステムとして空間の意味付与と物理的再編に向けた価値の議論と運営という機能を有していることを明らかにした。

今田³⁾は 2008 年から 2013 年にかけて郡上八幡のまちづくり活動に携わりながら関係者からの聞き取り調査を行い、活動の生起や相互関係の様子を把握している。まちづくり組織は 2009 年頃から小規模かつ非地縁的な組織が増えており、その活動目的も多様化していることが把握された。

鶴田ら¹¹⁾は市民協働のまちづくりの実践の足がかりである郡上八幡の都市マスおよびその策定に付随して始まったまちづくり協議会の取り組みについて紹介している。

猪股ら¹²⁾は水利用施設の有する機能的特性、空間構造、記憶や体験の蓄積という 3 要素と町並み保存会や地区会といった水管理組織の実態把握を行い、それらの相互関係を分析することで水のまちとしての景観保全策を論じている。

橋本ら¹³⁾は共同でのものづくりを伴う地域行事である春祭りのみこしコンクールを対象とし、行事における組織運営や共同作業における仕組みの把握を行なっている。そこからみこし制作という共同でのものづくりが地域自治に対して、コミュニティにおけるキーパーソンの発見、結束意識の醸成、地域経済への貢献意識といった効果をもたらしていることを考察している。

b) まちづくりにかかわる市民組織の継続性に関する研究

田邊ら¹⁴⁾は「新しい公共」の担い手として期待される NPO や任意団体に対するアンケート調査から継続的な組

織運営における課題の特徴を定量的に分析している。既往文献レビューからアンケート項目を抽出し、回答の因子分析から活動課題は「技術やノウハウ」「活動目的」「人や組織」「情報発信」「収入や資金調達力」の 5 つに大別されることを明らかにしている。また、組織形態別に比較した結果、NPO 団体は任意組織に比べて「資金調達の仕組み」「市民参加の場の確保」「リーダーシップの発揮」に対して課題であると認識する傾向が任意団体に比べて強いことが分かり、NPO 団体は法人として組織化されることで、市民に対しての説明責任や情報公開が求められ、不動産等の権利能力の主体となることで市民や行政からの社会的信用が増すことで地域や社会の課題解決に向けた継続的な活動が要求されていることが考察されている。

一方で、個別の組織の展開を追う研究としては中伏らによる研究¹⁵⁾などが挙げられる。まちづくりの成果や経験が一定程度蓄積し、成熟期にある地域において既存組織が停滞を抱えた際に形成される新たな組織をアリーナ組織と定義し、その発生経緯と他組織との連関、各主体同士の資源のやりとりを通じた展開プロセスを分析している。

c) GTA を用いた計画学領域の研究

福井ら¹⁶⁾は、農村地域においてコミュニティ活性化に向けて行われた、市民と行政の協働での交通手段提供の取り組みを 2 年に渡り追跡し、その討議内容（会議録）から個人とコミュニティの成長プロセスを明らかにしている。

GTA に基づいてコーディングルールを作成し、ルールに従って KHcoder による計量テキスト分析を行っている。

(2) 研究の位置づけ

市民まちづくり組織の継続性に着目した研究は、田邊らのように定量的にまちづくり組織の課題把握を行う研究や中伏らのような通時的に特定の組織の展開プロセスを追った研究などが多く見られ、本研究は後者に位置付けられる。

本研究では市民まちづくり組織のコアメンバーに対するインタビュー調査を実施し、活動実態の把握を行った上で、その展開のプロセスについて質的分析を施すことで明らかにする。組織の展開について社会学的な背景をもつ GTA を用いて分析を行うことに本研究の独自性がある。

1.3 研究の方法

本研究では文献調査とインタビュー調査を行う。郡上八幡のまちづくりに関わる資料や研究について文献調査を行うことでまちづくりの変遷の把握を行う。まちづくりの変遷から、市民組織の活動に影響を与える対象地固有の要素について整理を行う。文献調査によって得られた対象地の出来事をもとに質問項目を設定し、関係者に対するインタビューを行う。インタビューから、郡上八幡における市民組織の活動のプロセスを明らかにする。

1.4 質的研究方法：M-GTA について

GTA とは、アメリカの社会学者バーニー・グレーザー（Barney G. Glaser）とアンセルム・ストラウス（Anselm L. Strauss）の二人によって 1960 年代に考案された研究アプローチである。理論と実証的研究のギャップという問題意識のもと、当時の社会学の主流であった理論検証型の研

究手法に対して批判的な立場から考案された手法であり、逐語録などのデータから理論を生成することに特徴がある。しかしながら、GTA の具体的な分析手法についてはグレーザー、ストラウス間で対立が生じていた。そこで、オリジナル版に立ち返り、ストラウスの深い解釈とグレーザーのシステムチックなコーディングを統合し、さらに2者の対立により複雑化していた分析方法を簡略化する独自の技法を導入したものが本下によって提示された修正版 GTA (以下、M-GTA) であり¹⁷⁾、本研究ではこの分析方法を用いる。

表 1. M-GTA の具体的な手順¹⁸⁾

ステップ	詳細
①研究テーマの設定	GTAに適した研究の特徴 ・直接的・対面的なやりとり(社会的相互作用)が発生しているもの ・扱う現象がプロセス的な性質を持つもの
②分析テーマの設定	分析で明らかにすることは何らかの動きを持った現象であるため、“〇〇のプロセス”というテーマとすることが推奨される。ただし、GTAの本懐はデータから理論を生成することにあるため、テーマはあくまでプロセス性を意識する程度に止め、分析を進める中でテーマを再調整する。
③分析焦点者の設定と概念の生成	分析焦点者のデータを対象に概念を生成する。文節で機械的に切片化するのではなく、概念のもととなる記述ごとに分割を行うため、分割されたデータの分量は概念ごとに異なる。生成された概念とそれに該当するデータ、他の概念との関係性、を1枚のワークシートにまとめる。
⑤他協力者のデータを照合・追加	④で生成したワークシートに追加もしくは新しい概念の生成を行う。
⑥⑤を繰り返す	概念間の関係性、上位概念(カテゴリー)を検討
⑦分析終了	概念が網羅的かつ、関係性が確認された状態(理論的飽和状態)となれば終了

①本研究の対象とする現象は市民組織によるまちづくり活動であり、そこには市民間や市民 - 行政担当者間のやり取りなど直接的な相互作用が想定される。

続いて、②分析テーマについて、本研究においては分析テーマを“コアメンバーの経験に着目した郡上八幡におけるまちづくり組織の活動の展開プロセス”とした。

続いて具体的な分析に移る。M-GTA の分析では切片化は行わず、インタビューの中から1人、分析焦点者を設定し、そのインタビューのデータから概念を生成し、そこに他のデータを追加していくという方法をとる。文節で機械的に切片化するのではなく、概念のもととなる記述ごとに分割を行うため、分割されたデータの分量は概念ごとに異なる。そして、生成された概念とそれに該当するデータ、他の概念との関係性、を1枚のワークシートにまとめる。(表2)

表 2. M-GTA の分析ワークシート

概念名	単語もしくはそれに準ずるもの
定義	概念を定義する短文
ヴァリエーション	具体的な発話内容を記載 凡例: (発話者ID, 引用箇所No.)……発話内容……。
理論的メモ	・概念名のほかの候補 ・他の概念との関係性(反対例や類似例など) など

分析焦点者のデータから概念が生成されきったら、それをもとに他のインタビューのデータをワークシートのヴァリエーションに追加する。あるいは、既成の概念に無い

ものについては新たにワークシートを作成する。すべてのデータに対してこの作業を繰り返し、概念が網羅的かつ概念間の相互関係が確かめられたとき(この状態を理論的飽和化という)、分析は完了となる。概念の生成を行うなかで、上位の概念(カテゴリー)の検討も同時に行う。

2. 郡上八幡のまちづくりに関する取り組み

2.1 対象地概要

岐阜県郡上市八幡町は、岐阜県のほぼ中央に位置しており三方を山に囲まれ、土地利用の約9割を山林が占めており、人口13,645人、世帯数5,408世帯¹⁹⁾の中山間地域である。吉田川と長良川、小駄良川の合流する地域に中心市街地が形成されており、中心市街地を東西に流れる吉田川を挟んで北側を北町、南側を南町と呼ぶ。戦国時代に築城された郡上八幡城の城下町として現在の町の骨格が形成された。地理的に他地域との交流が困難であったため城下町時代から独自の文化が地域に根付いており、国の重要無形民俗文化財である「郡上おどり」は特に有名である。また、降雨量の多さに加え、市街地東部の山岳部の保水力に富む地層により水資源に恵まれ、名水百選や水の郷百選に選定される名所を持つ「水の町 郡上八幡」としても知られる。

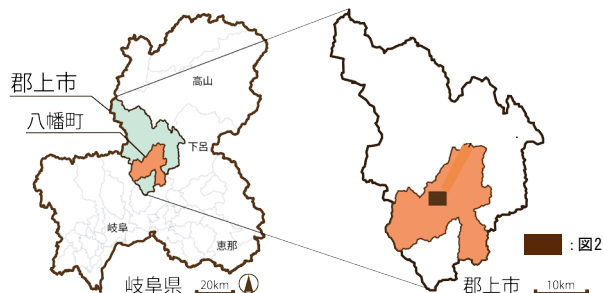
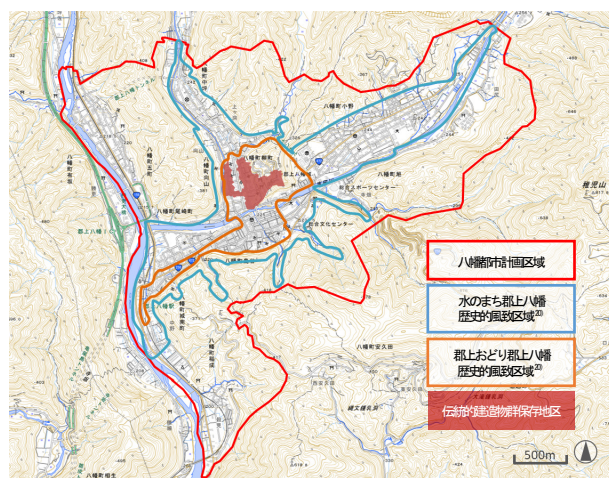


図 1. 郡上市八幡町の位置

図 2. 郡上八幡の中心市街地^{20) 21)}を元地理院地図に加筆

2.2 郡上八幡のまちづくり

郡上八幡におけるまちづくりの経緯について郡上市八幡都市計画マスタープラン(第2期)²⁰⁾を元にまとめる。また、文献よりまちづくりの変遷について年表図3を作成した。

(1) 水環境の保全・活用、ポケットパークの整備推進

八幡市街地における水環境の保全・活用の取組みは、1977年に渡部一二らによる水環境調査研究グループが、郡上八幡の個性的で豊かな水環境に関する調査のまとめ・発表を行なったことに始まる。この調査をきっかけに市民が水環境の価値を再認識し、水を活かした町並みづくりの動きが始まり1982年に「八幡町水を活かしたまちづくり構想」が策定される。また、市民や行政職員による郡上八幡の風情の喪失を危惧する声に対し、1984年に町総合計画策定時に景観形成と水環境の保全が大きなテーマとして提示された。水環境の価値再認識から、それを活かした空間整備(用水・井戸・水舟などを核としたポケットパークや親水遊歩道)が1985年頃より進められ、ポケットパーク整備に際しては市民も対象地検討に参加するなど、ハードとソフトの両面で市民・行政の協働での公共空間整備が進められた。

(2) 街なみ環境整備、空き家対策、歴史まちづくりの展開

水を活かしたまちづくりが進められる中で町並み整備が展開され始めた。1984年の町による町並み調査によって、大正・昭和初期の建物が八幡町には多く残されていることを再認識した柳町住民が、町並み保存会を1986年に組織し、町内の水路の整備と管理と並行して建物のデザイン基準制定と審査等を担った。柳町の活動が近隣の職人町、鍛冶屋町にも広がった。また1991年には、対象エリアを八幡都市計画区域とした景観条例を制定し届け出制度も開始された。

こうしたテーマ毎のまちづくりが軌道に乗り始めたことから、1990年代には総合的なまちづくりに向けた体制づくりが始まる。1996年には「八幡町都市計画マスタープラン」が策定され、90年代後半になって顕在化してきた様々な課題に対応するための施策が位置づけられた。1998年には八幡市街地のまちづくりを考える「まちづくり協議会」が発足し、行政サイドでは、市街地の残された拠点整備実現のために旧建設省の街なみ環境整備事業の認可をうけ、道路の美装化や照明整備等が進められた。

一方で、町並み保全や市街地活性化の観点から、空き家の増加が大きな課題として認識されるようになり、1996年より空き家調査が実施され、課題解決のための方策の検討等が行われた。空き家活用ワークショップ等、空き家活用の取組みが展開されている。

また、街なみ環境整備事業を活用した建物修景助成事業が展開され、歴史的町並み景観が整ってくる中で、2005年に歴史的建造物の悉皆調査が実施された。調査より市街地の約3,000棟の建物の内1,237棟が歴史的価値のある建造物であることが確認された。2010年からは伝統的建造物群保存地区指定に向けた保存対策調査が行われ、2012年8月に郡上八幡北町伝統的建造物群保存地区に都市計画決定するとともに、保存計画を策定・告示した。2014年2月には、歴史まちづくり法に基づく郡上市歴史的風致維持向上計画が国の認定を受けている。

(3) 市街地環状道路整備、市街地内交通対策

八幡市街地の道路については、1958年に着手された都市計画事業で整備が進められてきた。1980年代後半以降は、中心市街地の空洞化に歯止めをかけるため、外周道路による基幹道路整備は進めつつも、まち中に関しては城下町の魅力ある市街地を継承する方向に転換がなされた。そのため、1975年に南町を横断・縦断する都市計画道路を見直し、外周道路と北町の殿町通りを延長する(山本・初音線)整備方針が策定された。しかし、1996年度に策定された「八幡町都市計画マスタープラン」内で、山本・初音線について見直しの必要性が示され、2002年に都市計画道路の廃止が決定している。市街地環状道路については、1995年の町道中坪小野線の開通で完成している。市街地内を通る都市計画道路が廃止になる中で、1998年に「八幡町市街地地区交通計画」が策定される。2001年に、住民・団体・企業・有識者・行政の代表からなる「交通円滑化検討委員会」が発足し、2001・2002年度に交通円滑化の社会実験が行なわれた。この社会実験のひとつとして、コミュニティバスの運行が行なわれ、その効果が確認されたことから、2003年より低床バス「まめバス」の運行を開始している。

表3. 郡上八幡のまちづくりの変遷図に用いた文献・資料

	1972-1981	1982-2005	2006-2014	2015-2019
計画・構想		都市計画MP ²¹⁾ 『水のまち郡上八幡』 ²³⁾		郡上市HP ²²⁾
公共空間・ インフラ整備		都市計画MP 『水のまち郡上八幡』		
市民まちづくり 組織		高橋修論 ²⁾ 都市計画MP/『まちのコンパス』 ⁵⁾ /研究論文 ¹²⁾	インタビュー調査/組織HP ²⁴⁾	

3. 初期に形成された対象組織の活動実態

3.1 インタビュー調査概要

調査対象組織の選定にあたり、郡上八幡のまちづくりの経緯をまとめているおり、組織の生起のいきさつについてもデータのある高橋の研究²⁾を参考にした。2005年時点で活動が確認されている10組織のうち8組織(計12名)に対して関係者へのインタビュー調査を実施した。(表4)

表4. インタビュー調査の概要

調査方法	インタビュー調査		
対象者・実施日	組織分類	組織名	氏名(データID) 実施日
	水環境	さつきの会	I・K(A) 2019年8月30日
			K・T(B) 2019年8月31日
			T・Y(C) 2019年8月31日
	町並み保存	いがわと親しむ会	H・K(D) 2019年8月29日
			A・M(E) 2019年8月30日
			Y・T(G) 2019年8月30日
	参加共同	伝建協議会	O・H(H) 2019年11月12日
			G・H(I)
			K・T(J) 2019年11月10日
	語り継承	子どもどりのタベ実行委員	T・S(K) 2019年11月12日
まちづくりNETWORK 2019年11月12日			
産業振興 郡上八幡産業振興公社 2019年11月11日			
インタビュー内容	設立経緯、活動内容、活動頻度、おおよその会員数、解散の経緯など		
データの取り扱い	インタビュー内容をボイスレコーダーで記録した後、書き起こしを行った。		

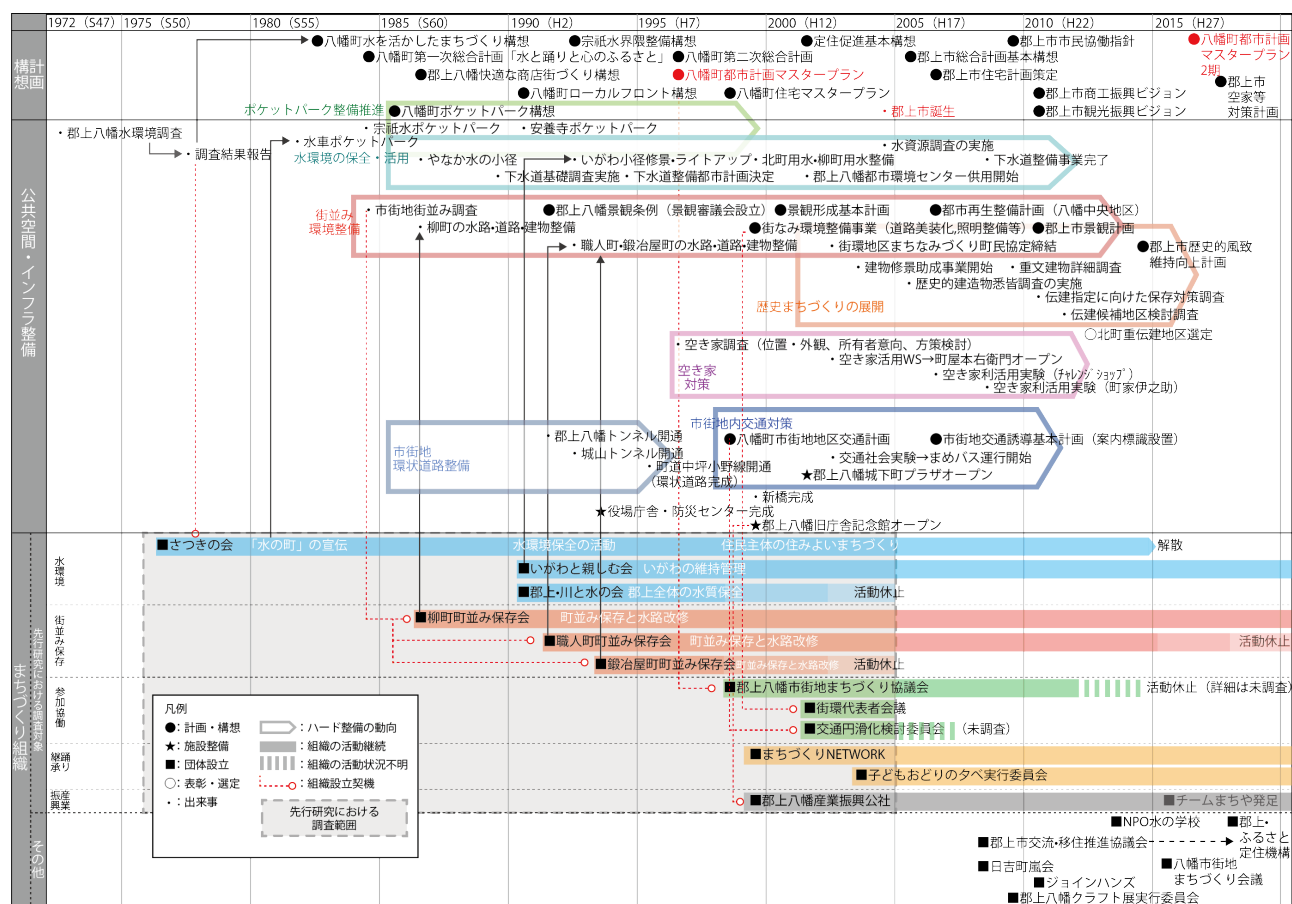


図3. 郡上八幡のまちづくりの変遷

3.2 市民まちづくり組織の活動実態

市民まちづくり組織の概要については設立経緯などを含め高橋の研究で2005年までの内容が把握されている。インタビュー及び先行研究を含む文献調査より、現在の活動内容なども含めたものを表5に示す。また、代表的なものを以下に述べる。

(1) さつきの会

さつきの会は「勉強を通じて八幡町を良くするための会」として発足し、発足後に渡部らによる水環境調査を受け活動テーマを「水」にフォーカスすることになった。活動内容としては水舟の設置や「水の町郡上八幡」ステッカー配布、水に関する図書の寄贈など、水の町であることの啓蒙活動が主であった。現在の活動実態については、会員数の減少が深刻化し、活動費である会費が減少したことで活動が停滞し2015年に解散に至った。活動資金は創立から解散まで一貫して補助金を受けずに月1000円の会費によってまかなわれていた。

(2) いがわと親しむ会

いがわと親しむ会は生活スタイルの変化によるいがわの汚染をきっかけに発足した会である。いがわの清掃と鯉の飼育が主な活動である。発足から3年間は会員から会費を徴収していたが、修景が行われ観光スポットとなったことから行政に対して働きかけ、補助金の支給を受けるようになった。2000年頃には主に観光客に向けた鯉の餌箱を設置

し、その収益の3割を会の活動費として観光協会から受け取る仕組みを作った。現在も活動を継続している。

(3) 柳町町並み保存会

上柳町、中柳町、下柳町の3つの水路組合を統合したものが保存会であり、保存会の会長は上中下の3つの自治会で1年毎の持ち回り制となっている。水路管理や安養寺ポケットパークの管理を行っており、町並みについては建物審査部会が設けられていたが、街並み環境整備事業に伴うまちなみ町民協定によって行われるようになった為、部会はなくなった。また、郡上市になったタイミングで行政からの補助金が50%から40%に減少した。

現在でも活動は続けられており、会費の徴収方法などの変更はされていない。ただし、保存会の会長について、以前は各自治会長が保存会長を兼任する形だったが、負担を軽減するため保存会長を自治会長とは別にたてることを認可するようになった。補助金は以前のものは支給されなくなったが、別の制度で代用しておりポケットパークの花苗等は補助を受けている。

(4) 職人町町並み保存会

職人町町並み保存会は柳町同様、水路の改修と町並み保存の一体的な整備のため発足した組織である。活動内容として柳町のような水路清掃などに加え視察旅行が多く、半額が行政の補助金、半額は自己負担となっていたが市へ合併される際に補助金が減額された。水路清掃に関しては

表 5. まちづくり組織の概要

組織名	設立	設立経緯	活動目的	活動資金	構成メンバー	活動内容	現在の活動状況	
水環境	さつきの会	1976	町長選挙時、住民自らが行動し町を良くしていこうという考えに至った	水環境保全と観光地にふさわしいまちづくり、行政への働きかけ	会費：月1000円、寄付金	主要発足：1975年頃の町長選挙時のグループ賛同者：郡上市全域（ピーク時には総勢約130人） 2015年時点では総勢約60名ほどに減少	河川清掃、図書館への図書の寄贈、魚の放流、魚観察施設の設置 最終年は図書館の寄贈と石碑の設置を行った	2015年解散
	いがわと親しみ会	1990	住民が魚の放し飼いをしたが、当時家電製品の普及に伴い用水は水質が悪く魚の飼育が出来ない環境であったため清掃を開始	いがわ小径での鯉の飼育、生活用水路だったいがわの美化	行政、自治会からの補助金 観光客向けの鯉の餌の収益（観光協会）から3割を授受	常盤町の講仲間や有志約30名 約15名に減少	いがわ小径の維持管理（雑草取り、鯉の餌やり）	活動継続
町並み保存	柳町町並み保存会	1986	柳町の水路組合が水路の老朽化を行政に陳情。水路改修に伴って町並み保存を行うことを総合計画に照らし合わせて行政が提示、住民はそれに賛同した	水路管理と町並み保存	自治会費（50円/月・戸）、補助金	柳町（上柳・中柳・下柳）の地域住民、93年頃から事務局は各自治会長が持ち回り制	水路清掃、ポケットパーク管理、景観整備（建物審査） 水路清掃、ポケットパーク管理、建物審査は街環の「まちなみ町民協定」で行う。	活動継続
	職人町町並み保存会	1991	柳町に続く形で水路改修と町並み保存を一体で行うことになった	水路管理と町並み保存	自治会費（年5万円）、寄付、補助金 住民の減少に伴って自治会費が減少、補助金は2013年以降なし	職人町の地域住民 職人町の地域住民（2.3人が活動）	水路清掃（当番制から個人管理に変化）・ポケットパーク管理・建物審査・研修旅行 水路清掃は個人管理、ポケットパークは電線地中化に伴い縮小、建物審査は街環の「まちなみ町民協定」で行う。	活動休止
参加協働	街環代表者会議（中央区域）	2001	MPIに応じて道路整備を町並み保存と一体で行う街並み環境整備事業を町が実施、協定策定のため住民の協議の場を設けた	街並み環境整備事業の具体的事業の推進	補助金	八幡中央区域9自治会の代表者	まちなみ町民協定の制定のための議論 —	2004年頃解散（協定策定後は各自治会長が建物審査）
踊り継承	まちづくり NETWORK	1999	空き地になった警察跡地（現：城下町プラザ）の有効活用	毛付市の復活と徹夜踊りのない日に訪れた観光客に向けた踊りの開催	共同出資（2万/人）、出店費 共同出資（5000円/人）、出店の出店費（3000円）、旅行会社からの出資（2018年まで）	北町の3・40代を中心とする有志約20名 発足メンバーに加えて当日設置は商工会青年部が協力	徹夜踊りのない日に踊りを実施、同時に町内の物産の販売を行う	活動継続（資金不足をきっかけに2020年終了予定）
	子どもおどりのタベ実行委員会	2003	地元出身の子どもの踊り離れへの危機	観光客のいない日程での子どものための踊り開催	個人や商店などからの協賛金 協賛金、文化庁の補助金	発足時の実行委員17名 中学高校のお囃子クラブ、ボランティア部などに呼びかけ、実行委員会の負担を軽減	年1回、子どもおどりの開催	活動継続
産業振興	郡上八幡産業振興公社	1999	役場移転に伴う旧庁舎の利活用の検討時、当時の町長が「観光を軸とした産業振興」を打ち出したことを発端	観光拠点運営で観光を軸とした産業振興	財団法人（市観光施設の管理委託） 一般財団法人（委託事業から指定管理者制に変更、町家ステイなど直轄事業も実施）	設立時は行政からの派遣職員4名＋プロパー職員 プロパー職員16名（全体50名）	観光施設の運営、文化体験などソフト事業 観光施設の運営、文化体験などソフト事業、空き家利活用（移住者への紹介、町家宿泊事業）	活動継続

2005年までの内容
2005年以降の変更

2005年時点で当番制が廃止されており、個人での清掃に切り替わっている。また、ポケットパークである職人町スポットや水舟の設置も行われており、その維持管理も会の活動だったが、水舟は管理の困難さから撤去され、ポケットパークに至っては伝統的建造物群保存地区指定に伴う電線地中化に伴い地上危機が設置され現在廃止されている。現在では事実上活動休止状態となっている。

(5) 街環代表者会議

八幡都市計画マスタープランに対応して行われた街なみ環境整備事業をきっかけに組織された。街なみ環境整備事業は住民による町民協定の締結がセットになっており、対象地域の自治会の代表者らが集まりワークショップを行い議論が行われた。会議組織としての活動は町民協定の施行された2002年のおよそ2年後の2004年頃には終了しており、その後は建物審査を各自治会の代表者が行うという取り決めになっている。なお、先行研究時点では調査対象としていた組織は八幡中央地区の代表者会議であったが、中央地区から2年遅れて2004年から八幡南部・北部・東部地区においても町民協定が施行されている。また、北部地区の中で伝統的建造物群保存地区に選定されている区域については町民協定とは別に、郡上市伝統的建造物群保存地区

保存条例にて規制が敷かれている。

(6) まちづくり NETWORK

まちづくり NETWORK は設立当初は実行委員による共同出資で活動を行っていたが負担を低減するため、2006年からは旅行会社と提携して踊りを開催することで20万の資金を獲得した。また、商工会の青年部に協力を仰ぐことで負担の軽減を図った。しかし、2018年に旅行会社からの資金の提供が打切られたことに加え、開催場所である北町では伝建地区指定に伴って電線地中化が行われ、踊り開催のための電源取得に以前の3倍の費用が掛かるようになった。これら財政的な負担が増大したことから、2020年の開催を最後に解散することが2019年に決定された。

(7) 子どもおどりのタベ実行委員会

郡上踊りに多くの観光客が訪れ、その混雑のため地元の子供たちが安心して踊ることができないという状況を危機した地元有志が、地元の子供たちのための踊りを開催しようと始まった活動である。設立当初は実行委員による個人の出資と商店からの協賛金で活動を行っていたが、岐阜県から文化財に関する補助金を受け取ることで資金を獲得している。また、運営メンバーについても、当初は立ち上げメンバーが主であったが、途中から地元中学・高校のボラ

概念の生成に当たっては、郡上八幡の市民まちづくり組織の展開プロセスを把握するべくインタビュー対象組織全体をデータとして用い、対象地における一般性をもつ概念の生成を試みたため、必然的に抽象的なプロセスが確認される結果となった。より実情を反映した詳細な市民まちづくり活動の特性を把握すべく、概念よりも具体的なサブ概念を組織ごとに設定し概念関係図を作成した。以下、代表として柳町町並み保存会についての結果を例示する。

4.1 概念の生成

表7. サブ概念と具体的な記述内容（柳町町並み保存会）

[illegible]

組織内

組織外

活動の背景

地域社会の特性

先例の踏襲

行政との関係性

他組織との関係

組織運営

活動の性質

伝播

協力

対比

活動の状態

次段階

評価

外部視点

枠組み変更

展開ストップ

凡例： カテゴリー

概念

The diagram is a flowchart illustrating the background and status of an activity, organized into several interconnected boxes and sections.

- 活動の背景 (Background of Activity):**
 - 地域社会の特性 (Regional Society Characteristics):**
 - 多層世代の交流 (Multi-generational exchange)
 - 同世代の会 (Peer group)
 - 奉仕活動による社会的スキルの養成 (Cultivation of social skills through volunteer activities)
 - 影響力のある人物による民得 (Acquisition by influential figures)
 - 行政との関係性 (Relationship with Administration):**
 - 官民の目的一致 (Consistency of goals between officials and citizens)
- 活動の状態 (Status of Activity):**
 - 組織運営 (Organization Management):**
 - 自己実現としての活動 (Activity as self-actualization)
 - 食田集への解消 (Elimination of food field collection)
 - 仕事量の集中への追従 (Following the concentration of work volume)
 - 仕事量の分散 (Dispersion of work volume)
 - 活動のためのシステム (System for activity)
 - 活動の性質 (Nature of Activity):**
 - 定期的活動 (Regular activity)
 - 活動の普及化 (Popularization of activity)
 - 他組織との関係 (Relationship with Other Organizations):**
 - 伝播 (Diffusion)
 - 成功例への追従 (Following successful examples)
 - 活動の性質の差異 (Difference in the nature of activity)
 - 財政が重点に影響 (Impact of financial focus)
 - 意欲の物理的表出 (Physical expression of desire)
- 次段階 (Next Stage):**
 - 自己評価 (Self-evaluation):**
 - 行政の未編織強化 (Strengthening of unorganized administration)
 - 制度的インセンティブ (Institutional incentives)
 - 外部からの評価 (Evaluation from Outside):**
 - 活動に対する承認 (Recognition of activity)
 - 外部視点 (External Perspective):**
 - 外的視点による資源発見 (Discovery of resources from an external perspective)
- カテゴリー (Category):**
 - 概念 (Concept)
 - サブ概念 (Sub-concept)
- 凡例 (Legend):**
 - 概念 (Concept)
 - サブ概念 (Sub-concept)
- 枠組み変更 (Framework Change):**
 - 展開ステップ (Expansion Steps):
 - メンバーのリアライズ (Realization of members)
 - 行政キーマンの養成 (Cultivation of administrative keyman)

【活動の背景】として、【地域社会の特性】や【行政との関係性】の中で、もしくは【先例の踏襲】によって生じし、【組織運営】の試行錯誤と【活動の性質】によってその【活動の状態】を変化させていく。活動の中では【他組織との関係】として活動の【伝播】や他組織との【協力】が行われる。そして、活動の蓄積から【次段階】として自己／他者による【評価】がなされる。なお、他組織との【対比】による【評価】も確認された。そして、【外部視点】による新たなテーマが与えられたとき【評価】を元に活動は【枠組み変更】を起こす。そこで、【展開ストップ】となり活動が定常状態となる。

- ・ 親世代の集まり（町内の役・自治会）と同世代の集まり

り(頼母子講)が併存しており、同世代の集まりではテーマを自ら設定してまちづくりに関する取り組みを行っていた。

- ・活動の初動期にはリーダーとなる存在(知恵者、生きがいみたいな感じでやる人)が活動を先導していたが、負担の集中とそれに伴う当事者意識の薄れ(お任せ、無責任)を解消するべく町内持ち回り制を導入した。
- ・活動が定期的(清掃は順を決めて、毎年の木橋の手入れ)であることで習慣化(朝起きて歯磨くようなもん)している。
- ・同じく町並み保存を行っている隣町(職人町・鍛冶屋町)の活動と対比させて自らの組織の活動を位置づけている(うちは作業的なことで職人町さんは視察旅行が多くて…)

以上の要点はコミュニティの基礎としての頼母子講、隣への暗黙の意識、水利用との親しみ深さなど郡上八幡というまちの特性や地域性を表していると考えられる。

5. まとめ

本研究の成果は以下のとおりである。

- 1) 郡上八幡におけるまちづくり組織 8 組織の活動実態を文献およびインタビュー調査から把握した。運営方法の変更の有無や継続実態については組織ごとに多様であった。
- 2) インタビューから得られたテキストデータに対して、M-GTA の手法を用いた質的分析を行った結果、郡上八幡における市民まちづくり組織の展開プロセスのカテゴリーとして【活動の背景】【活動の状態】【他組織との関係】【次段階】があり、それぞれ概念として【地域社会の特性】【先例の踏襲】【行政との関係性】、【活動の性質】【組織運営】、【伝播】【協力】【対比】、【評価】【外部視点】【枠組み変更】【展開ストップ】が存在することが明らかになった。
- 3) 組織ごとに2) の概念だけでなくより具体性のあるサブ概念を設定し、各組織の展開プロセスの図化を行った。市民まちづくり活動には頼母子講という活動の源的存在や町間の意識、地域資源とのかかわりを通じた身体化など、郡上八幡の社会的・風土的な特徴が根底にはあることが示唆された。

本研究では市民まちづくり活動がどのように展開してきたのかという問いに対して質的分析方法を用いて把握を試みたが、背景でも述べた新規居住者の流入や、既存住民と他地域との交流を掲げた活動が行われる²⁴⁾など郡上八幡は変化の状況下にある。今後の展望として、3)の考察で述べた社会的・風土的な背景を共有しない住民も含めた活動は如何に展開するのか、という観点での分析を行うことで今後の市民まちづくりに向けた状況の俯瞰や課題の把握に繋がれると考える。

<参考文献>

- 1) 篠原修編：景観用語事典 増補改訂版、彰国社、p.116-117、2007。
- 2) 高橋敬宗：郡上八幡におけるまちづくりの展開プロセスに関する研究、2005 年度早稲田大学大学院修士論文、2006。
- 3) 猪股誠野、武藤啓晴：郡上八幡における先進的空き家対策の取り組みとその課題、景観・デザイン研究講演集、No.13、pp.451-454、2017。
- 4) 今田太一郎：郡上市八幡町におけるまちづくりネットワークの実態—自己生成型まちづくりネットワークのメカニズムに関する研究—、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、pp.915-916、2015.9。
- 5) 八幡市街地まちづくり会議：まちのコンパス—あしたの郡上八幡をみつめる—、vol.2、2019.3。
- 6) 郡上市、総合トップ、市政、郡上市総合計画、第1次郡上市総合計画、https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/shisei_first_gujo_totalplan/(最終閲覧日：2020/01/23)
- 7) 総務省、コミュニティ研究会、第1回資料、https://www.soumu.go.jp/main.sosiki/kenkyu/community/pdf/070207_1_sapdf(最終閲覧日：2020/01/23)
- 8) 渡部一二、郭中端、堀込憲二：水縁空間 郡上八幡からのレポート、住まい学大系 055、住まいの図書館出版局、1993.3。
- 9) 齋藤知恵子、三浦卓也：郡上八幡における歴史的資源調査—歴史的資源を活かしたまちづくりにむけた歴史的建造物調査—、日本都市計画学会 都市計画論文集、No.42-3、pp.439-444、2007.10。
- 10) 石田勝美：郡上八幡におけるまちづくりと郡上おどりについての調査研究、名古屋文化短期大学研究紀要、第37集、pp.55-61、2012.3。
- 11) 鶴田佳子、武藤啓晴、小栗未麻：住民との協働による都市計画のための「市町村都市計画マスタープラン」の活用方法に関する研究—岐阜県郡上市八幡町における「市町村都市計画マスタープラン」の位置づけとまちづくり協議会の考察、日本都市計画学会 都市計画論文集、No.35、pp.223-228、2000.10。
- 12) 猪股誠野、佐々木葉：郡上八幡における水利施設の維持管理組織の実態把握、景観・デザイン研究講演集、No.12、pp.216-221、2016.12。
- 13) 橋本優華、佐々木葉：共同でのものづくりを伴う地域行事の特質と意義に関する研究—岐阜県郡上市八幡町における春祭りを対象として—、景観・デザイン研究講演集、No.11、pp.263-270、2015.12。
- 14) 田邊信男、氏原岳人、阿部宏史：継続的なまちづくり活動に向けた組織運営の課題とマネジメントの方策に関する考察—活動者の観点に基づく分析—、日本都市計画学会 都市計画論文集、Vol.51、No.3、pp.553-559、2016.10。
- 15) 中伏香織、真野洋介、佐藤滋：密集市街地における地域運営のアーナ形成と展開プロセスに関する研究、日本都市計画学会 都市計画論文集、No.39-3、pp.325-330、2004.10。
- 16) 福井のり子、力石真、藤原章正：農村地域の活性化にむけた初動期における個人とコミュニティの成長プロセス—グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)と複線経路・等時性アプローチ(TEA)による検証—、日本都市計画学会 都市計画論文集、Vol.52、No.2、pp.209-219、2017.10。
- 17) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生、弘文堂、1999。
- 18) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い、弘文堂、2003。
- 19) 郡上市、市政、郡上市の紹介、郡上市のデータ、月別住民基本台帳人口(各月1日現在)、<https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/detail/1045.html>(最終閲覧日：2020/01/23)
- 20) 郡上市、総合トップ、市政、計画・構想、まちづくり、郡上市歴史的風致維持向上計画、<https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/detail/4451.html>(最終閲覧日：2020/01/22)
- 21) 郡上市、総合トップ、市政、計画・構想、まちづくり、郡上市八幡都市計画マスタープラン第2期(平成28年4月)、<https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/detail/7102.html>(最終閲覧日：2020/01/22)
- 22) 郡上市、総合トップ、市政、計画・構想、まちづくり、https://www.city.gujo.gifu.jp/admin/shisei_town_planning/(最終閲覧日：2020/01/22)
- 23) NPO 法人郡上八幡水の学校：水のまち郡上八幡 水のめぐみを活かす知恵 郡上八幡の水環境とまちづくり、郡上市、pp.19-20、2016.3。
- 24) 人と地域をつなぐ 郡上八幡クラフト展、めざすこと、<https://hachikura.jimdofree.com/%E3%82%81%E3%81%96%E3%81%99%E3%81%93%E3%81%A8/>(最終閲覧日：2020/01/23)